



審査委員特別賞

日本工学院八王子専門学校
大貫 龍紀

【作品名】
帆船の家

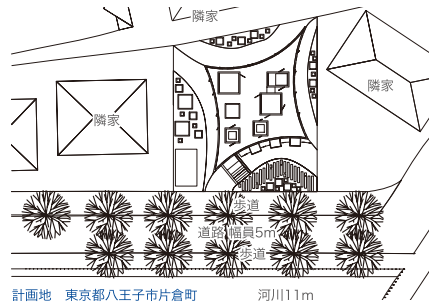


テーマ

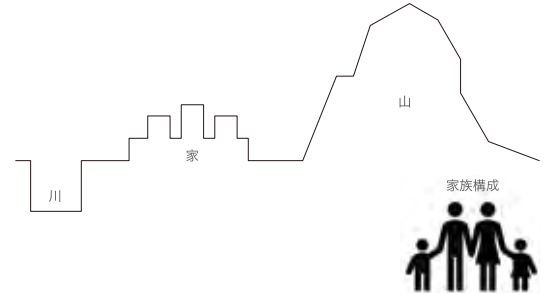
環境問題と気候風土の問題を解きながら、人々の暮らしに寄り添い内にも外にも開くカタチを模索

コンセプト

気候風土と温熱環境を「帆」の特性で解き、快適で情動に寄与する住宅を提案



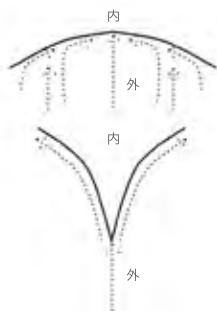
計画地 東京都八王子市片倉町 河川11m



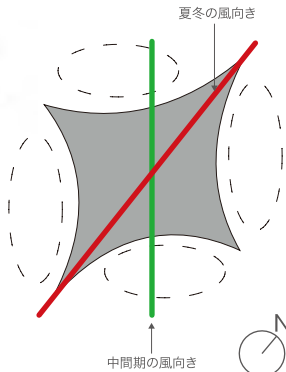
1. 帆の話

快適な住環境には、空気の流れが重要なカギを握る。風は暮らしにおいて重要な役割を果たすが、夏と冬の寒暖差の激しいこの土地では、外気による熱損失をなるべく抑えることが大切である。帆の形状を利用し、風を受け止め取り込む面と、風を受け流すニュートラルな面を作るといった設計手法をとった。南北の鋭いエッジは夏と冬の風をかき分け、緩やかにたわんだ箇所は中間期の心地良い風を内部へと取り込む。

帆によって心地よい風を受け止める



鋭いエッジは不快な風を受け流す



中間期の風向き

2. 平面計画の話

住宅内で空気を循環させ、風の動きと人の回遊動線を生み出す。各部屋-LDK間で分散・集結するように計画。細かいボックスによって周辺環境に対してのボリュームを落としている。



2F



3. 断面計画の話

八王子市は小規模ながらも盆地状の地形であるため、内陸性で寒暖差が激しい。安定した環境を生むために居住部分を半地下へ沈める設計手法(敷地はハザードマップ対象外)を取り、帆の架構によって半地下を有効に利用する。



開口部を大きく設けると夏と冬の熱損失が大きくなるため、煙突効果やベンチュリー効果、ソーラーチムニーなどによって効果的に換気を行うことが望ましい。



1階はGL-800mmまで下げる。これはヒューマンスケールに則った高さであり、GLから遠いと半地下である必要がなくなり、GLが目線と同レベルであれば地面の圧迫感によって心地良いものではなく、GL-800mmというのは椅子に座った際に胸下くらいにGLがあり、キッチンとほぼ同じ高さである。庭と適度な距離感で、自然と生活が対等な関係性を持つ暮らしが生まれる。

設計コンセプト

未来に向かっての住宅の在り方の一つとして、バイオクライマティックデザインという設計手法が挙げられる。これは地域の気候風土などの特性を利用して、人間にとって快適な住環境を作るというデザイン手法である。それは数字としての建築ではなく、暮らしの中で人々に様々な情動を与える形態である必要もある。

私の考えるバイオクライマティックな新しい住宅とは、暮らしにおける根本的な環境問題と、気候風土から導き出された問題を解きながら、先駆的・積極的に内にも外にも開くカタチを模索することである。建築とは地に建つものであり、三次元的で、人々の暮らしの表れである。

今回提案した住宅は大地と大気を明確に隔てるのではなく、暮らし

の中で、その両者を肌を感じる距離感から生まれるデザインと情動を模索した。

川が流れ、山々の稜線が美しい緑豊かな八王子の地には、その景観を紡ぐ様な建築が相応しいのではないだろうか。ここでは大気の動きから導かれた流線的な「帆」のカタチ、暮らしの中で大地との適度な距離感を生む「半地下」、空気を共有することで生まれる「循環と温熱環境」。いわば地に建つ帆船の様に風を制御し、大地に少し沈み、大気という「大きな海」をたゆたいながら過ごす住宅である。「地の象徴」としての八王子に「地に根ざした帆船」として、人々の暮らしと環境を支え、大きな自然の中を航海する新しい住宅の提案をする。

審査委員講評

通風と採光。この言葉ほど、いつの時代も日本人が家に求めてきたものを言い得ているものはないと思います。この作品にも、自然のエネルギーだけで四季折々快適に暮らすことを実現しようとする気迫が感じられます。「帆の話」に始まり「航海の話」で締める展開も楽しく、随所にちりばめられた専門性の高いワードの意味もすっと腑に落ちました。